

# 原子野の花

## 常設 版画展

～松本と長崎をつなぐ～

絵:永井隆(長崎) 版画:加藤大道(松本)

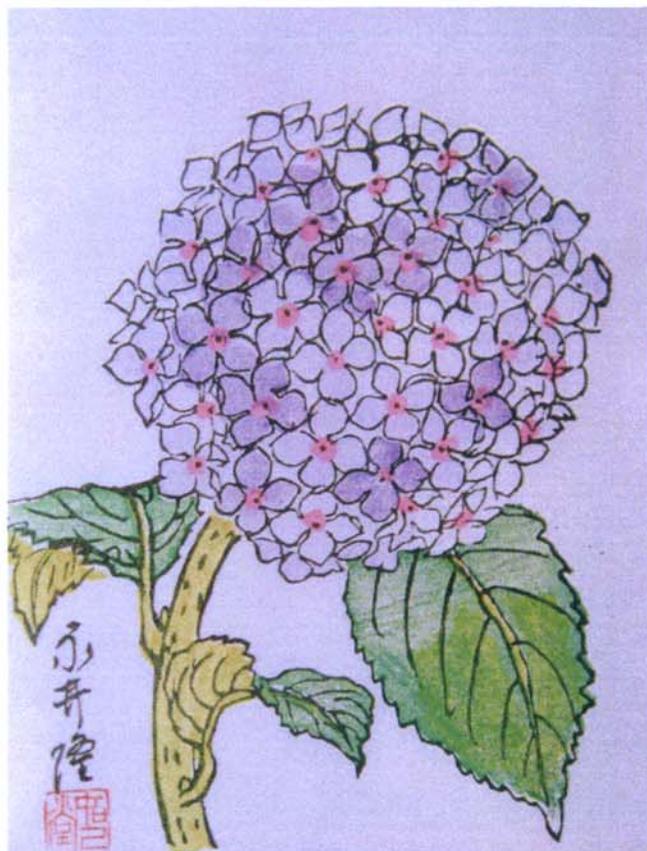


# 原子野の花

## 常設 版画展

～松本と長崎をつなぐ～

絵:永井隆(長崎) 版画:加藤大道(松本)



Cafeプレイエル&ギャラリーやましろ

長野県松本市波田3058-5 (上高地線 新島々駅西隣)  
Tel 0263-92-8158 定休日 水・木

<http://www.cafe-pleyel.com/> [facebook.com](https://www.facebook.com/)

# 原子野の花

## 常設 版画展

～松本と長崎をつなぐ～

絵:永井隆(長崎) 版画:加藤大道(松本)



Cafeプレイエル&ギャラリーやましろ

長野県松本市波田3058-5 (上高地線 新島々駅西隣)  
Tel 0263-92-8158 定休日 水・木

<http://www.cafe-pleyel.com/> [facebook.com](https://www.facebook.com/)

# 平和願う版画 長崎へ

## 古畑博子さんが寄贈

松本市波田の上高地線新島々駅隣でギャラリー併設の喫茶店を営む古畑博子さん(67)はこのほど、長崎市役所に田上富久市長を訪ねた。店では、松本市安曇出身の木版画家・加藤大道(1896~1965)が、長崎の原爆で被爆した医師・永井隆(1908~51)の絵を版画にした作品を展示している。

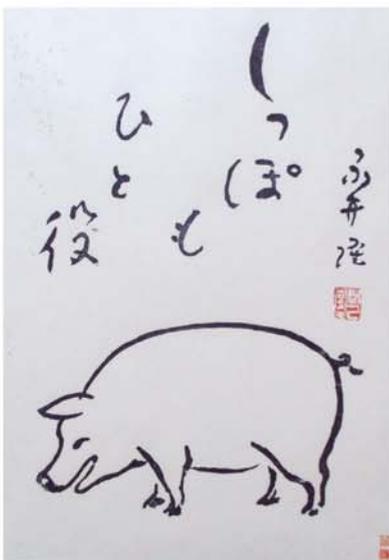
古畑さんは平和を希求する両市の交流の深まりを願って加藤と永井の交流を紹介し、長崎市と市永井隆記念館に、2人が合作した版画2点を寄贈した。永井が書いた「平和を」の書を基にした版画を長崎市役所に、豚



長崎市役所で記念撮影する(右から)田上市長、古畑さん、記念館館長で永井の孫・永井徳三郎さん

が、永井が書いた長詩「長崎の鐘」に曲を付けて古畑さんの喫茶店で初演した。古畑さんは、平和首長会議国内加盟都市会議が松本市で初めて開かれた昨年秋から、田上市長にたびたび手紙を送っていたが、今年8月、長崎へ行くことを田上市長に手紙で伝えると、面会が実現した。迎えてもらい、思いを伝えることができた」と話し、松本市で来年5月に開催が予定される「日本非核宣言自治体協議会(会長・田上市長)の総会に併せ、田上市長の総会に併せ、田上市長のギャラリー訪問を願う。「長崎は平和に加え、歴史や文化を学ぶにもいい場所」と、両市の交流が進むことに期待している。

(赤羽洋輔)



(第3種郵便物認可)

松本市内

# 永井博士との「合作」市に寄贈

## 「平和を」

### 版画家・故加藤大道氏が制作

長崎原爆の被爆者治療や浦上地区の復興に尽力した被爆医師の故永井隆博士と交流があった長野県松本市の版画家、故加藤大道氏が永井博士の書を基にして制作した版画を、同市在住のカフェ経営者、古畑博子さんが長崎市と市永井隆記念館に寄贈した。



永井博士の書を基にした加藤氏の版画を田上市長（右）に見せる古畑さん  
＝長崎市役所

古畑さんによると、加藤氏は1948年ごろに永井博士の著書「この子を残して」を読んで感銘を受け、博士の子どもたちに自分の作品を贈った。これをきっかけに交流が生まれ、永井博士の原画を加藤氏が版画に仕上げ、送り返

## 長野・松本の古畑さん「両市の交流につなげて」

す形での「合作」が始まった。2人は「いずれ東京で展示会を」などと意気込んでいたが、博士が51年に亡くなり、合作は計15点で終わった。作品は版画集「原子野の花」にまとめられた。

古畑さんは、経営するカフェにギャラリーを設け、加藤氏の作品を展示。「原子野の花」の作品も全て並ぶ。戦後70年のことし、2人の友情を振り返り、平和を願う長崎、松本両市の交流につなげようと、版画の寄贈を決めた。版画は加藤氏の長男で、同じく版画家として活動した重治氏（故人）が、父の版木を使い、病床で刷ったもの。

古畑さんは、20日に市役所を訪れ、寄贈品の一部で、永井博士の「平和を」の書を基にした版画を田上富久市長に手渡した。加藤氏が「いつか長崎に行ってみよう」と手紙でつづっていたことに触れ、「（版画を長崎に届けたことで）役割を果たすことができたと話した。（六倉大輔）

# 平和へ市民の力を

## 松本の古畑さん 長崎市長を訪問へ

松本市波田で「カフェブレイエル&ギャラリーやましろ」を経営する古畑博子さん(66)は20日、長崎市庁舎で田上富久市長と会う。古畑さんは、原爆症研究と長崎復興に尽力した医学博士永井隆と、松本市安曇出身の版画家加藤大道の交流について伝える。また、大道を継いだ長男の故事治さんが永井博士の書を刷った版画を手渡す。(松尾尚久)

## 永井博士と加藤大道 交流伝え版画届ける

「平和を願う松本と 天の花」や辞世の句を長崎の草の根の交流の歌にした「白薔薇(は一助になれば)」と話す古畑さん。カフェには、永井博士(1908)、奏者辻幹雄さん(千葉51年)と大道(1889、6~1965年)の共作版画を常設展示。ソプラノ歌手渡辺しおりさん(岡谷市)と一緒に永井博士作詞の「南の松本初開催を前に、



古畑さんがこれまでの活動を伝える一通の手紙を田上市長宛てに出したところ、活動に感謝する市長直筆の手紙が届いた。

戦後70年の今年、長崎へ行くことを決めていた古畑さんは、永井博士書の版画を届けることを計画。8月、11月20日に長崎へ行くことや、その際に市庁舎へ寄って作品を届けたことなどを手紙にしたためた。すぐに長崎原爆資料館から連絡があり、市長に直接会って作品を渡すことになった。田上市長は今年の平和宣言で、「私たち一人一人の力こそが、戦争と核兵器のない世界を実現する最大の力。市民社会

田上市長に届ける版画作品を手にする古畑さん。後ろは永井博士の絵や言葉を大道が版画にした作品群

の力は政府を動かし、世界を動かす力」と訴えた。古畑さんは「まさにその言葉とおり、県外の一市民の思いにまで心を寄せてくださった」と感謝する。市内にある永井隆記念館にも別の版画を届ける。

◇ 古畑さんにはもう一つの目的がある。

2007年1月、本紙の読者ひろばに、原爆投下直後の長崎の惨状を伝える下関市在住の深堀敏さん(当時75歳)の投稿が4回連続で掲載された。その文章の中に、叔母の夫として「長崎大学院勤務の田川さん」が出てくるが、この田川さんが、永井博士と親しかった「田川初治さん」ではないかと推測。確かめるべく人を訪ね、もし確認が取れたら、安曇野市内に住む深堀さんの弟に報告したいとする。古畑さんは「小さな縁を大事にし、人を助け、心をつなげていった先に、平和の実現があるのではと感じている」と話した。

## 《永井隆と加藤大道の交流》展

《第5回 戦争と平和展》で、～永井隆博士と加藤大道の交流～が松本市博物館で開催されました。松本市主催の、戦後70年のメイン企画として、全国そして外国のたくさんの方々に見て頂けたことは、この上なく嬉しく思います。

十二畳の“ギャラリーやましろ”に《原子野の花》を展示し日々一緒に過ごして13年、永井博士と大道さんはさぞ喜んでいらっさることでしょう。何故か、気持ちが伝わってくるのです。版画は複数、世に出ています、永井博士直筆の原画を観ることが出来る貴重な展示です。私自身もたくさんの気づきをいただきました。唯、残念なことがあります。「えぞぎく」と「ぶたのしっぽ」の2点のみ原画が無いことです。今となっては致し方ないかもしれませんが、これから大切な文化遺産、平和遺産として保存していただき、常設展示、もしくは8月の恒例の展示として、埋もれずに、全国発信して行って頂きたいです。《永井隆と加藤大道の交流》展、本当にありがとうございました。

2015年8月 古畑博子 記

公開中

第5回戦争と平和展

「永井隆と加藤大道の交流」

松本市立博物館

現在、松本市立博物館では、第5回戦争と平和展「永井隆と加藤大道の交流」を開催しています。

戦争と平和展は、平成23(2011)年に開催された「国連軍縮会議in松本」を契機に、松本市立博物館で毎年夏に開催されている展覧会です。

本年度は、放射線医学者・平和運動家の永井隆と、安曇村(現松本市)出身の版画家・加藤大道について、その交流と作品をテーマに、展覧会を行っています。

永井隆(1908〜51)は、松江市に生まれ、長崎市で放射線医学者として研究や医療活動を行いました。放射線は病気を治す一方、多量に浴びると害を及ぼす性質を持っています。当時、すでに防護器具や放射線量の測定による安全対策は考えられていましたが、戦時下における物資・人手の不足と患者の増加がそれを許さず、永井は無理な

## 絵画の背後に見る不条理

研究・治療を行うことになりました。その結果、規定量以上の放射線を浴び続け、白血病を発症し、余命数年の宣告を受けます。

月9日、長崎に落とされた原子爆弾で妻を失い、自身も重傷を負います。しかし、永井は医学者として原爆症患者の治療に力を尽くしました。病状が悪化してからも、病床で執筆活動を行い、戦争の悲惨さと平和の大切さを訴え続けました。

近い将来、孤児となる自分の子どもの未来を案じて書かれた永井の著書『この子を残して』を読んだ加藤大道は、強い感銘を受け、遠く離れた安曇の地から、永井に子どもを題材にした自作の版画集を贈りました。ここから二人の交流が始まり、永井は原子野となつた長崎に咲いた花や、愛娘の茅乃などを描いた絵を加藤に贈りました。加藤は息子と共に、永井の絵を版画作品として刷り上げました。

今回の展覧会では、この交流から生まれた絵画作品を中心に、展示を行います。永井と加藤の思いから、戦争の悲惨さと平和の尊さについて、あらためて考える機会となれば幸いです。

(松本市立博物館学芸員・丸山和子)



永井隆 原画、加藤大道 刷  
「茅乃像 祈り」

松本市立博物館(丸の内)の第5回戦争と平和展「永井隆と加藤大道の交流」は23日まで。会期中無休。観覧料は一般200円、小中学生100円。問い合わせは松本市立博物館(☎0263・32・0133)へ。

加藤と永井の合作(奥)や書簡が  
並ぶ展示会場



加藤大道

永井隆

# 平和への思い 合作に

旧安曇村(現松本市) 永井の書や絵を加藤が版  
出身の版画家・加藤大道 画にする作業が幾度とな  
(1896~1965) く繰り返された。

と、長崎市ゆかりの放射  
線医学者・永井隆(19  
08~51)の交流の軌跡  
をたどる展示会が23日ま  
で、松本市立博物館で開  
かれている。原爆で妻を  
失い、2人の幼子を育て  
会場には、原爆に焼か  
れた長崎に再び咲いた花  
や永井の娘の茅乃が描か  
れた版画が並ぶ。永井の  
絵を加藤が彫った作品で  
原画も多数そろろう。丸山  
和子学芸員は「平和を愛

## 市立博物館で展示会

ながら平和運動に尽力し  
た永井と、その姿に感銘  
を受けた加藤との交流が  
生んだ合作を中心に50点  
余を並べている。  
する思いが表れている。  
遠い被爆地と心の通った  
交流をした人が身近にい  
たことを知ってほしい」  
と話している。

交流の始まりは昭和23  
年、原爆投下後に永井が  
執筆した『この子を残し  
て』を加藤が読み、感銘  
を受けて連絡したことが  
きっかけだった。以後、  
毎夏開催する「戦争と  
平和展」の第5回に位置  
づけた。入場料は200  
円、小中学生は100円  
で会期中無休。  
(有賀文香)

# 松本と長崎 つなぐ版画

上

## 重ねたやりとり 作品集に

長崎に投下された原爆で被爆し、平和を祈る著作を残した長崎市の放射線医学者永井隆（1908～51年）と、松本市安曇の版画家加藤大道（1896～1965年）の交流が今、人々を引き付けている。戦後、永井が亡くなるまで約2年間、絵や版画をやりとりし、

合作で版画集も残した2人。被爆から9日で70年となる節目に、長崎と信州をつないだ思いを見つめ直す。（東 圭吾）

松本市丸の内市立博物館で1日、永井と加藤の交流を伝える企画展が始まった。永井が花や自分の娘を描いた原画と、これらを元に加藤が刷った版画計30点を対に並べている。永井が送った書簡もガラスケースに入っている。

担当する学芸員、丸山和子さんの23は、この展示に関して初めて2人の交流を知った。永井は亡くなる5年前から病床に伏しながら著作に励み、反戦の思いを込めた作品を世に出した。一方の加藤は戦中戦後、北アルプス

### 被爆者励ます思いが生んだ交流

の山岳風景の版画を作り、絵はがきにして上高地で販売した。

来事だと思っていた原爆被害が身近に感じられるようになった」と話す。

永井は原爆で妻を失い、自らも被爆しながら負傷者の救護に尽力した。その生き方は世界中に知られている。加藤を通じて信州とつながり、丸山さんは「どこか遠い所の出

2人の交流は、死の床にあった永井が原爆投下時に10歳だった息子と3歳だった娘へ「お父さんのおい」とつぶやいた。この子を残してこう記してある。

を「残して」を、加藤が読んだのがきっかけだ。永井は研究で放射線を浴び白血病を発症、原爆投下2カ月前に余命3年の診断を受けていた。脾臓が腫れて安静にしていなければならず、若い娘を思うように抱くことができなかつた。娘は昼寝する

の同人誌で「幼い子どもさんの姿を思い浮かべ、万感胸に迫り、長崎の空へ家族一同にて合掌をした」と振り返っている。永井の子どもを慰めようと、信州の子どもが遊ぶ様子や日本アルプスの版画集を送ったところ、永井から丁寧なお礼の手紙が届いた。



永井隆 1908（明治41）年、学構内で被爆し、頭部動脈切断の大松江市生まれ。旧制松江高校、長崎医科大学（現長崎大医学部）で学び、放射線医学者に。キリスト教の洗礼を受け、26歳で結婚。爆心地近くの大



加藤大道 1896（明治29）年、南宋画を研究し帰国。39年に木版画の制作を始め、故郷の安曇村で子どもたちや北アルプスの山々を描いた作品を多く残した。



永井が加藤に送った絵（手前）と、これを元に加藤が作った版画（奥）＝7月31日、松本市立博物館

こうして共同で作ったのが版画集「原子野の花」だ。永井は序文で「原子野の土も5年たてば、やさしくなったのか、今では美しい花が咲くようになりました」と記した。松本市立博物館の企画展では、この版画集から、原爆投下で焼け野原になった後の長崎で咲いた花、人形で遊んだり祈ったりする永井の娘などが並んでいる。

# 松本と長崎 つなぐ版画

中

## 2人の縁から広がる輪

「妖雲 空を とぎして」  
天日 くらみ/さながら 世  
の終わりなり」

7月18日、松本市波田の喫  
茶店「カフェブレイエル&ギ  
ャラリーやましろ」。店主の  
古畑博子さん(66)の朗読に合  
わせ、暗く、寂しい曲調の11  
弦ギターが響く。十数人がじ  
っと聞き入った。

古畑さんが朗読したのは、  
長崎市の放射線医学者永井隆  
(1908〜51年)が書いた  
「長詩『長崎の鐘』」。長崎  
に投下された原爆で妻を亡く  
し、自らも白血病で終戦6年  
後に亡くなる永井が、原爆投  
下前の長崎の様子や投下直後  
の惨状、平和への願いを表現

戦後70年 信州から

### 「平和」を問う

### ギターや歌 受け継ぐ平和への思い



した147行の詩だ。  
曲を作って演奏したのは千  
葉県船橋市のギタリスト、辻  
幹雄さん(63)。昨年秋に旧知  
の古畑さんの勧めでこの詩を  
読み、心を動かされた。約10

カ月かけて作曲し、この日が  
初演。辻さんは「戦後70年の  
今年を起点に、ライフワーク  
としてこの曲の演奏を続けた  
」と話した。

古畑さんが店を開いたのは  
2002年。開店に際し、父  
親の友人が展示用にと安曇村  
(現松本市安曇)の版画家加  
藤大道(1896〜1965  
年)の作品を貸してくれた。

その中に「永井隆」と記し  
た版画があった。著作を通じ  
て永井を知っていた古畑さん  
が関係を調べたところ、永井  
が亡くなるまでの2年余、2  
人は交流し、永井が描いた絵  
を加藤が版画にしていたこと  
が分かった。

「戦争を考える上で貴重な  
題材だ」。2人が合作した版  
画を03年から店内に展示し、  
加藤の親族から譲り受けた永  
井から加藤への手紙も並べて  
いる。

観光客など店に偶然立ち寄  
って永井を知り、引かれてい

長詩「長崎の鐘」の朗読に合わ  
せる曲を作った辻さん(左)  
と、古畑さん(7月18日、松本  
市波田のカフェブレイエル&  
ギャラリーやましろ

く人は少なくない。既に永井  
を知る人は、加藤との関係を  
新鮮に感じ、「松本に永井博  
士が関係しているとは知らな  
かった」と口をそろえる。

岡谷市天竜町の音楽家渡辺  
しおりさんも3年前、知人の  
勧めで訪れた同店で2人の関  
係を知り、「永井さんが作詞  
した曲を歌いたい」と思うよ  
うになった。原爆の焼け跡の  
ナンテンを題材にしたとされ  
る「南天の花」をインターネ  
ットで知り、楽譜を入手。詩  
の背景を知ろうと、永井が書  
き残した本を何冊も読んだ。

「キリスト教徒としての信  
仰の厚さと、子どもたちを思  
う優しさ、俗世的な人間味も  
感じた」。今は「南天の花」  
と、永井の辞世の歌に作曲家  
の山田耕柞(1886〜19  
65年)が曲を付けた「しろ  
ばらの」を好んで歌う。

加藤との関係をきっかけに  
永井が松本と結び付き、古畑  
さんを中心に共感の輪が広が  
ろうとしている。古畑さんは  
「永井博士と加藤さんのつな  
がりやが少しずつ知られること  
で、平和を求める社会の機運  
も高まってほしい」と願って  
いる。

# 松本と長崎 つなぐ版画

下

## 戦争ない世界願い継ぐ

蒸すように暑く、クマゼミの音が響く長崎市街地。原爆で被爆し、平和を祈る著作を残した放射線医学者永井隆（1908～51年）をしのぶ記念館が、爆心地の近く、永井の自宅だった場所にある。館長を務める永井の孫、徳三郎さん（49）は7月下旬、敷地内にある「如己堂」に来館者を案内していた。

永井は亡くなるまで3年余、この2畳一間で病と闘いながら作品をつづった。1949（昭和24）年発表の「いと子よ」もその一つだ。施行されたばかりの日本国憲法が戦争放棄を宣言したことに触れ、「これこそ、戦争の惨

戦後70年 信州から

### 「平和」を問う

### ありふれた日常 合作の思い



永井が亡くなるまでの3年余を過ごした2畳一間の建物「如己堂」を案内する孫の徳三郎さん＝7月28日、長崎市

禍に目覚めたほんとうの日本人の声なのだよ」と喝采。一方で「国際情勢次第では、日

い」と警戒した。

今の国会で「日本を取り巻く情勢が変化している」として、集団的自衛権行使を可能とする安全保障関連法案の審議が進む。憲法学者の多くが法案を違憲と指摘するが、与党からは「学者の言う通りにしていれば、日本の平和と安全は絶対守れない」（高村正彦自民党副総裁）との発言が飛び出す。

被爆から70年の今、課題にどう向き合うか。徳三郎さんは「自分は政治に門外漢」としつつ、「いろんな考えがあつていいが、70年前の惨状につながる動きを許してはいけない。最後の1人になつても戦争には反対する」と言う。

松本市安曇の岡村清子さん（76）は小学校時代、器に載ったピワの実に「父はひとり母はひとりわがへそは一つ」と言葉添えた版画が校長室に飾られていたのを覚えている。地元版画家加藤大道（1896～1965年）の作品だ。約30年前、加藤の功績を見直すグループの結成に加わり、永井の絵を基に加藤が彫ったものと知った。

そのころ、グループで長崎を訪ね、如己堂を見た時、永井と、原爆で母を失った子ども2人が肩を寄せ合う光景が目について「難しいことはよく分からない」と岡村さん。ただ「永井さんが訴えた平和を望む気持ちは私も一緒」と強調する。

永井隆記念館には全国から見学者が訪れる。パンフレットは、永井と加藤が合作した版画も掲載している。目を閉じて両手を合わせる少女、口に風船を近づける幼い娘……。徳三郎さんは「ありふれた日常、たわいない親子の暮らしを送れることが幸せなのだと思ふ」と言い、永井が描く日常を加藤が彫った信州は「永井にとっても特別の場所だったのでないか」とみる。

# 口 差 点

こうさてん

…つるぎを捨てよ じつじつとく いくさ  
を捨てよ とことわに 平和をまもれ 地  
の極みまで 平和をまもれ 世々の未まで  
…ひろく歌われている「長崎の鐘」の他  
に、これは永井隆博士自身が書きのこし  
た、もう一つの長詩「長崎の鐘」です。

鐘」を朗読と音楽で、原爆忌に先立ち、初  
演のコンサートが行われます。長崎と松本  
をつないだ友情の共作版画「原子野の花」  
(永井博士の原画で加藤大道の彫り)が常  
設展示されている、ゆかりある会場から第  
一步の発信です。

70年前、世界で初めて原爆が投下された

昨年9月、「原子野の花」が展示された

広島と長崎。その惨状を見、衝撃を  
受けた作曲家・山田耕筰は「長崎の  
鐘」を歌劇

場所ですさんと冬のコンサートの打ち合わ  
せをしていたとき、幻となった長詩「長崎  
の鐘」に話が及び

か交響詩に  
しようかと決

## もう一つの「長崎の鐘」

ました。以来、構  
想を温めていた辻

意します。しかし、白血病の永井博  
士の他界と耕筰の病のため、ついに  
世に出ることはありませんでした。

さんは、5月、完成した曲を携えてお見え  
になりました。そのときのギターの響きが

戦後70年、ちょうど山田耕筰没後  
50年の今年、日本を代表する日弦ギ  
ターの作曲家、ギタリストの辻幹雄  
さんが作曲し、未完の長編叙事詩

「長崎の鐘」の産声となったのです。今  
後、この詩と音楽が多くの人々に響き伝わ  
り心がつながり、永井博士が訴え続けた、  
愛と人類平和の世界が築かれるように願っ  
てやみません。戦後70年を平和元年、出発  
の年にしたいものです。

「長崎の鐘」がよみがえります。

(松本市波田、古畑博子、66歳)

150行にわたる叙事詩「長崎の

# 南天の花

永井 隆

南天の花咲きぬ

ひそかに咲きぬ

おもかげはかなしかるもの

この花のしづかさに似て

焼跡にふたたび生きて

南天の花は咲きぬ

南天の花散りぬ

ひそかに散りぬ

おもかげはほのかなるもの

この花のはかなさに似て

焼跡にわれのみ生きて

南天の花に泣きぬ

白薔薇の花より香りたつごとく

この身を離れ昇りゆくらむ

一九五一年五月一日遊く

永井 隆 辞世の歌

「白薔薇の花より香りたつごとくこの身を離れ昇りゆくらむ」

原子野のアラギ歌人永井隆が、好きだった白薔薇に逝く身を重ねて詠んだ辞世の歌、今ここに白薔薇が香ってくるかのような一首です。私には、先立った妻のもとへと旅立つ希望の歌にも聞こえてきます。

永井博士が被爆し白血病に伏していた如己堂の庭に、一本の南天の木があります。1945年8月9

日、長崎に投下された原子爆弾。焼け尽くされた原子野の自宅跡に残っていたのは、妻のわずかな遺骨と溶けたサンゴのロザリオでした。傍らに、軒先にあった南天が生きていたのです。永井博士は、その南天を如己堂の庭に植えました。妻の命の代わりのような南天、毎日どんな思いで眺めていたのでしょうか。

「南天の花咲きぬ：おもかげはかなしかるもの：南天の花散りぬ：焼け跡にわれのみ生きて南天の花に泣きぬ」この詩と辞世の歌に、山田耕筈が作曲した美しい歌曲があることは、あまり知られていません。「白薔薇」は耕筈の自筆譜が残るのみ、「南天花」楽譜は既に廃版。しかしこの度、渡辺しおりさんのソプラノでよみがえることになりました。中山博之さんが「白薔薇」を編曲しピアノで、「南天の花」の楽譜は長崎の永井徳三郎氏（博士のお孫さん）が提供してくださいました。永井博士の原画に加藤大道が彫った共作版画「原子野の花」と野中秀司さんの白薔薇の油絵に囲まれ、人の縁の環で裏表現するコンサートは奇跡に思えます。

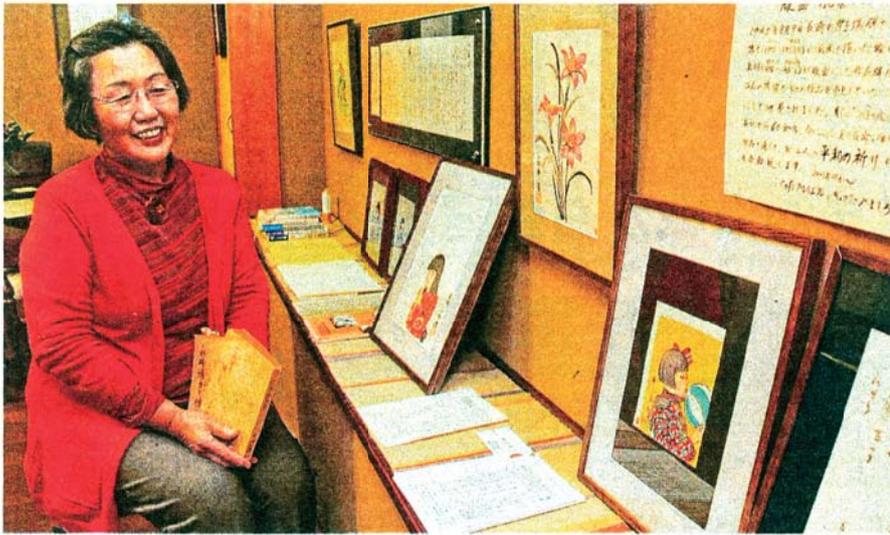
## 白薔薇と南天の花

### 点 差 口

こうさてん

南天はいま青々と如己堂に茂り、永井博士白薔薇の辞世から64年、山田耕筈没後50年、平和を祈る戦後70年の春を迎えます。  
(松本市波田、古畑博子、66歳)

# 平和願う心結ぶ版画に光を



永井さんと加藤さんが合作した版画を展示している古畑さん

## 長崎の医学者と旧安曇村の版画家 合作

松本市波田の喫茶店経営古畑博子さん(65)は、長崎に投下された原爆で妻を亡くした長崎医大(現長崎大)の放射線医学者永井隆さん(1908

### 常設展示の喫茶店「原爆の悲劇 考えて」

古畑さんは2002年に喫茶店を開店した。父親の友人が、集めていた加藤さんの版画を「店内の展示用」と貸してくれた。その中に「永井隆」と印刷された作品があり、2人の関係を調べ始めた。

永井さんの著作などによると、永井さんは研究で放射線を浴び白血病を患い、45年に余命3年と診断された。その2カ月後に長崎に原爆が落ち、妻を亡くした。自宅にいなかった当時10歳の息子と3歳の娘は無事だった。

永井さんは48年、母親を原爆で失い、父親も間もなく失うことになるわが子をふびんに思う気持ち

を「この子を残して」という本にまとめた。

加藤さんは、永井さんと面識はなかったが、「この子を残して」を読んで心を動かされた。永井さんの子どもたちを慰めるため自作の版画を送り、交流が始まった。

永井さんは、亡くなる1年前から自分で描いた絵を加藤さんに送り、加藤さんはそれを版画にして送り返し、合作の版画が生まれていった。幼い娘が人形で遊ぶ様子や、色鮮やかなアシサイの花など、作品から優しさが感じられる。

2人の交流を知った古畑さんは「松本と長崎の間に心温まるつな

がりがあった」と驚き、父親の友人から借りた版画15点全てを03年から店内で展示。永井さんが加藤さんに宛てた手紙も入手し、来店者に紹介している。

平和首長会議の国内加盟都市会議の開催市は、これまで広島、長崎の2市だけで、被爆地以外が会場となるのは初めて。古畑さんは「この機会に、2人の交流に光が当たってほしい。松本の子どもたちが長崎を通して平和を考える環境ができる」と話している。

問い合わせはカフェプレイエル&ギャラリーやましろ(☎0263

・92・8158)へ。

51年)と旧南安曇郡安曇村(現松本市)の版画家加藤大道さん(1896～1965年)が続けた交流を知ってもらおうと、2人が合作した版画を店内に常設展示している。核兵器廃絶を目指す平和首長会議(事務局・広島市)が10、11日に松本市で開く第4回国内加盟都市会議を機に、2人に光を当て、原爆の悲劇を考えてほしいと望んでいる。

## 私の声



庭先に、白い南天の花が咲いている。

〈南天の花咲きぬ／ひそかに咲きぬ：焼跡に ふたたび生きて／南天の花は咲きぬ〉

長崎に投下された原子爆弾で被爆した医師、永井隆の詩「南天

の花」の始めの一節だ。これに山田耕柞が曲を付けた。この美しい歌曲を知る人は少ない。

歌の存在を知ったのは、昨年の秋ごろ。私は12年前からカフェを開いている。岡谷市のソプラノ歌手、渡辺しおりさんがこの楽譜を探し求めて、暮れのカ

フェのコンサートでこの歌を歌った。

60年以上生きてきて、南天の花を真剣に見たことがなかった。クリスマスや正月に赤い実を付けるので重宝していたけれど、白い花が咲くことも知らなかった。

そこに、小さな南天が奇跡のように生きていた。永井はそれを闘病生活を送った家の庭に植えた。70年近くを経て身の丈を越す高さとなり、今も青々と葉を茂らせているという。

ひそやかに、目立たぬように咲く南天の花。花が散っても、

## 南天の花ひそやかに

いすれ赤い実を結ぶ。人も世も、平和の実を南天のように結んでほしいと思う。

永井は瀕死のなかで救護を続け、たどり着いた自宅の焼け跡。(古畑博子・65歳・松本市)

【投稿の方法】800字以内。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、〒3880-8546 長野市南泉町657 信濃毎日新聞文化部「私の声」係。☎026・236・3143、ファクス026・236・3194。メールwa-koee@shinmai.co.jp。採用分には謝礼。原稿は返却しません。二重投稿は禁止。採用分は当社データベースに収録し、一般に公開します。

Cafe プレイエル併設のギャラリーやましろ(加藤大道ミニ美術館)には永井隆の原画に加藤大道が彫った共同作品《原子野の花》15点、永井隆亡くなる四ヶ月前の手紙、そして二人の書簡等資料を展示しています。平和を願って、いつも展示してありますので、ゆっくりご鑑賞ください。今後、歌曲「南天の花」に関して、知られざるお話をお伝えします。

鶏頭が夏の陽射しに真っ赤に燃えています。長崎に投下された原子爆弾で被爆した医師、永井隆が原画を描き、旧安曇村（松本市）の版画家、加藤大道が彫った連作版画「原子野の花」の紫陽花、葉鶏頭、エゾ菊。今年も、その季節が廻ってきました。焼け尽くされた原子野の土に五年経って咲いた夏の花たち、何と愛おしいことでしょう。

カフェブレイエル併設のたった十二畳のギャラリーやましろ「加藤大道美術館」に常設をはじめ、十年がたちました。今まで声なき作品たちが、今年はこの頃になって語りかけてくる声が聞こえてくるのです。

「我が子よ・日本をめぐる国際情勢次第では、日本の中から憲法を改めて、戦争放棄の条項を削れと叫ぶ者が出ないとも限らない。いかにももつともらしい理屈をつけて世論を再武装に引きつけるかもしれない。・その時こそ、どんなのしりや暴力を受けても、戦争絶対反対を叫び通しておくれ」と。（永井著「いとし子よ」より引用）六十五年前に書かれた予言とも思えることばです。又この詩も響いて鳴り止みません。

「つるぎを捨てよ ことごとく、いくさを棄てよ」とことわりに、平和を守れ地の極みまで」。永井渾身の平和の思いが凝縮された百五十行長詩「長崎の鐘」の一節です。作曲家・山田耕筰が、終戦秋、演奏の旅で広島・長崎を訪れた衝撃に、この詩を歌劇にする決意をしたのです。けれど、焦慮すればするほど、構想は混沌として、一音符すらもかきおろせず、と三年してもなお苦悩しつづけました。ついに世に出ることはありませんでしたが、病床の永井博士への思いをこめて、永井の書いた詩「南天の花」を美しい歌曲にして贈りました。

「南天の花咲きぬ・・・焼け跡にふたたび生きて、南天の花さきぬ

南天の花散りぬ・・・焼け跡にわれのみ生きて、南天の花に泣きぬ」

歌曲「南天の花」は、幻の歌劇「長崎の鐘」のプレリユードであったのかもしれない。今、歌劇「長崎の鐘」が演奏されていたならと残念に思いますが、原子野は表現を遥かに超えたものであったのです。

悲しいことに、今の日本に新たな原子野ができてしまいました。戦争による原子野も原子力の原子野も同じことを繰り返してはならないと切に思います。永井博士の「予言」を過去のものにしていかなくはなりません。

「真理はひとつ 世界はひとつ 腹のまん中にへそひとつ」、永井独特の温かい文字で書きそえられた、おおらかなザボンの絵の作品が「原子野の花」の版画の中にあります。私の大好きな版画です

「世界人類が平和でありますように」 平和はすべての人の心にあります。いつか、ギャラリーをおとすれ、「原子野の花」をご覧になってください。

二〇一四年八月

古畑博子 記



原子野の花

長崎

一九五〇年

永井隆  
加藤大道



原子野の土も五年たてば、やさしくなつたのか、  
今では美しい花が咲くよくにち~~な~~<sup>り</sup>ました。四季  
おりおりと暖きつぐ花を、支は手折つてきて、私  
のまくらへに飾ってくれます。私はこの花を通  
して、創造主の慈愛を感じます。来年と生きて  
びく、角びこの花を見るか、どうか、おぼつかない身  
には、養う老を教るにまかせて過ぎるのが惜しま  
れ、仰向けたぬ古さま、捕く不自由さのうち、に  
ものした絵が、かまりの教にまじりました。  
それをも信物の加藤公明が本版にして下さつたの  
がこの畫帖です。

長崎市浦上

ふ舟隆



# 版画 莊 隨 想

## 永井隆先生と私

加 藤 大 道

先生の著作になる「この子を残して」が出版になりました時、たま／＼それを読みました私は、平和への深い祈りを抱く先生の御心境に心を打たれ、更に又母を召されそして原子病の犠牲に明日をも知れぬ先生を看護する幼い子供さんの姿を思い浮べ万感胸に迫り遙に長崎の空へ家族一同にて合掌を久しうしたのでありました。

私は子供さん達の少しの慰めにもと、山村の子供を題材とした拙ない木版画童心帖を送りましたところ、ほどなく未知の先生から御心の籠った御便り「童心帖を贈られ恐縮しました御手紙により一眼で作られたものなるよしを承りことさらありがたい御志とおもいました。雪と空との対照の美しい信濃はアラギ系の歌でなつかしく想像していましたがこの鮮に見せて頂いて胸がスツとしました。私は出雲の生れですので雪国の子供として育ちました。童心帖は私の幼時さながらです。」をいたゞき大変喜ばれましたのが長崎と信濃を遠く結ぶ縁となつたのです。この版画が意外にも先生を御慰さめ出来た事が尊く嬉しく、次々と新作を折にふれ先生の枕辺へ送り届けました。

昨年六月先生の天盃受領の報に拙作を取り揃へ送りましたところ非常に喜ばれ「うれしさのあまり絵筆をとりました御笑覧にそなえます。」といつて器にビワを入れた画に

父はひとり 母はひとり わがへそは一つ

の題のある作品を贈られて来ました。その画を手にした瞬間私は生涯忘れる事の出来ない深い感動を覚へたのです。承諾を得てその作品を版画にしたのが始めとなり先生から種々の作品を寄せられました。私も感激に満ちただ先生への御慰めにと先生の作品に全力をつくして精進致し、出来上るのをおまち下さる病床へ一刻も早く御届けするのが私しの全てでありました。

昨年の秋も深くなつた十月末すでに前途を予期してか「まだ描かねばなりません弱りがひどくまさに手も動かなくなりそうにしていますので大いそぎで急ぐものから片つけています。私の版画はどうかたくさん売つて下さい私には何も謝礼はいりません、なぜなら今まであなたから一方ならぬ大恩をうけています、その御礼のいみで描いているのですから、少しでも利益がありましたら御子さまの学資におつかい下さればよろこびます」

と慈愛の溢れた御便りと先生の版画の題字「原子野の花」及言葉等を一緒に送つて頂いたのが先生の私しへの絶筆となりその後はずべて代筆となりました。本年四月十九日附の最後の代筆にて「私も近頃安静につとめております、何分にも発熱が続き弱つております、いつも／＼私しのために祈り下さいます感謝しております」の報を頂くともまもなく五月一日に尊い聖い御生涯をとちて静かに昇天なされました。私は先生の御心持を尊く受け先生をしたふ皆様に「原子野の花」を御わけしたいと思います。(二十六年 初夏)

なお相馬御風先生との関係は、先生からのお手紙にもありますように、私の作品が古村青山さんによつて紹介されたこと、続いて白雲会の人々の来訪となり、またこれ等の人々の尽力によつて長野市その他に於て展覧会を開催して頂いたことなどの因縁がだんだん深まつて、相馬先生の信州に於ける作歌に、私が木版手摺の挿画をして発行するといふまで話が進んでいたのですが、遂にその実現を見ずに終つたといふことは、まことに残念なことであります。



## 寄稿

先月、念願叶って、長崎の永井隆記念館を訪れた。故永井隆博士のお孫さんである館長の永井徳三郎様にお会いし、1冊のファイルを手渡すことができた。永井博士が旧安曇村の版画家・加藤大道宛てに送った十数通に及ぶ書簡の写しと、博士の死後も交流が続いた、今は亡き2人の遺児（誠一、茅乃）幼少年期の手紙。そして、永井・大道共作『版画集原子野の花』の博士直筆原画の写真等々である。徳三郎さんと語り合ううちに、今まで負っていた肩の荷がやっと下りた気がした。案内された如己堂。60年の時空を、超えて、そこに伏す永井博士に出会えたように思えた。

その後、平和案内人さんと待ち合わせをし、誠一君、茅乃さんが通った山里小学校へ向かった。長崎市では平和のための見学者ひとりだけでも案内人付き添わせてくれる。昭和20（1945）年8月9日、山里の児童1500人のうち1200人が原子爆弾の犠

かやのさんの版画を山里小学校の子供たちに見てほしかったから。昭和25年、大道の語ったことが新聞に残っている。「ぜひ、博士の病床を訪れたい」「先生のためなら何でもしてみたい。版画を通して、先生の人生観を普及したい」と。遠い長崎である。願いは叶わず、「原子野の花」16点と友情だけが残った。この度の長崎訪問で大道さんの念の一端を果たせたのかと自問している。こちらからは複製の絵葉書を、記念館からはパンフレットを。二つの地で、来館する方々に手渡しながら、ささやかでも平和の懸け橋になればと思う。

## 永井隆記念館と山里小学校

### 古畑 博子

牲となった。校内に原爆資料室がある。被爆当時の写真、遺品が数十点。解説文は子供たちの手書きである。昭和24年、永井博士は生存した子供たちの手記を『原子雲の下に生きて』の本に編集した。その印税で建てられた慰霊碑「あの子らの碑」が小高い丘に立つ

「かやのと風船」の版画を校長先生にお届けした。永井先生の絵で大道が彫った2人のたましいの結晶、美しい

（ふるはた・ひろこ）、  
ギャラリーやましろ  
「加藤大道美術館」主  
宰 松本市波田

展示された加藤大道あての永井隆最後の肉筆手紙



## 被爆した医学博士・永井隆

安曇村橋場の木版画家・加藤大道(一八九六一一九六五)が、長崎の原爆で被爆し感動的な生涯を閉じる医学者・永井隆(一九〇八—五二)と交流、作品集『原子野の花』を共作したことは知られているが、永井から加藤にあてた肉筆最後の手紙が見つかり、波田町上赤松の喫茶「カフェ プレイエル」のギャラリーに展示されている。

### 波田のプレイエル

手紙は障子紙をつなぎ合わせ、筆で丁寧にしたためてある。日付は昭和二十五(一九五〇)年十一月二日。永井が四十三

歳で没する半年前に当た

## 2人の深い交流示す

### 死の半年前「手も動かなくな…」

# 加藤大道あて 肉筆最後の手紙展示

「あなたからいたたい版画ひとそろいを長崎博物館へ資料として寄贈しました」に始まり、『原子野の花』の題字を大道あてに書き送った報告のあとに、「まだ描かねばなりません弱りがひどくまさに手も動かなくなり、大いそぎで急ぐものから片つ

「いただきます」とつづら

と、永井から「私は出雲の山奥(雪国)の生まれなので、版画で子ども時代を思い出しました」といった手紙が届いた。永井は大道版画に触れた喜びから絵筆を執り、陶器にヒツを入れた絵に「父はひとり 母はひとり わがへそは一つ」と記した作品を送ってきた。大道は深く感動し、その作品を版画に彫った。こうして共作が初めて誕生、二人は五十作を目指すが、十三作(『原子野の花』第一、第二集)までで永井はじくなってしまう。大道は永井の命が消えつつあるのを意識し、作品が届くとすぐ版画制作を進めていた。手紙では『原子野の花』の題字が書き上がり、大道の手元に届いたことが分かる。一方で、永井の手が動かなくなってきた悲痛な状態も知られる。事実、この手紙は本人の筆では最後となり、以後、手紙は代筆に代わ

「原子野の土も五年たてばやさしくなったのか今では美しい花が咲くようになりました。永井は仰向けに寝たまま、友が手折ってきてくれた花々を描き、命のたくましさ、はかなさを思いつつ平和への祈りを込めた。大道は遠く信州の山村にいてそれに応え、傑作集を生み出した。だが、二人は一度も会うことはなかった。

## 野すずみ

旧安曇村橋場（現松本市）に生まれ、版画家に加藤大道みちみちがいる。

「画家になりたい」と上京し、松本出身の日本画家・赤羽雪邦せっぽう入門、南宋画を学んだ。大志を抱いて中国に渡り、修業を積んで2年後帰国、結婚し、前途洋々に見えた。しかし、南宋画では生活が立ち行かなかった。帰郷して、木版画に転じる。豊かな暮らしなど望むべくもなく、創作に没頭した。

「素朴で温かい」「童心と郷愁を感じさせる」と、いまも見る人の心をつかむ作品の数々は、大道の魂、清貧を貫いた生涯そのものと言える。◆その大道は、長崎に落とされた原爆で被災し、病床に伏す永井隆（長崎医大教授）の著書『この子を残して』を読み、永井と二人の子どもの慰めになれば、と版画作品を贈った。そこから大道と永井の交流が始まり、永井の絵を大道が彫った共作『原子野の花』の出版にまで至る。◆広島に続き、長崎に原爆が投下されたのが、68年前のきょうである。歌謡曲「長崎の鐘」が有名だが、永井の随筆『長崎の鐘』をモチーフにする。そんな永井とつながる版画家が当地に存在した。作品は波田の喫茶「カフェプレイエル」で見られる。

2013. 8. 9